

【やまきわ美術館 展覧会開催のお知らせ】

2014年夏にオープンした「やまきわ美術館」は、松之山の上蝦池集落にある古民家を舞台とする現代美術ギャラリーです。

7月29日から9月25日まで、グループ展「草の根わけて家路をたどる」を開催いたします。出展するのは、東京・群馬・ソウルを拠点に活動する3人の若手作家です。

今年より当館はアートホテル・プロジェクトをスタートさせました。展覧会期間中、1日1組の方たちに館内の客室に宿泊いただけるという内容になっています。かつて農家の暮らしの場であったこの建物で、集落のおかあさん達が用意した晩ごはんをいただきながら、作品に囲まれてゆっくりとした時間を過ごすことで、同じ土壌から生まれた暮らしとアートを、来館の方たちに体験していただきたいと考えています。

本展は、そのようなプロジェクトのスタートに合わせて、「家」を起点として色々なモノとの隔たりを試す、ということをやテーマに据えています。それぞれの作品は、「家」と外界のつながりや境界線、あるいは逆に、「家」の内側への視線などを提示しており、来館の方たちにいつもとは違う家の在り方をお見せできるのではと思います。ぜひ一度、足をお運びください。

開催概要

展覧会タイトル	「草の根わけて家路をたどる」
会期	2016年7月29日(金) - 9月25日(日)
出展作家	飯沢康輔 / ミキョン・ソン / 滝朝子
開館時間	10:00 - 17:00 金・土・日
入場料	無料
会場	やまきわ美術館 新潟県十日町市松之山上蝦池350
宿泊	会期中の木・金・土・日 (詳細はウェブサイトをご覧ください)
連絡先	025-594-7667 info@yamakiwagallery.com
HP	www.yamakiwagallery.com
代表	福島ゆり

展覧会の詳細

「家」という拠点は誰もが持っているものであり、日常生活の場や外部との接点となっています。当館のように、自然の中にある古い家という特殊な場所から、家の内外に改めて目を向けた時、そこには何が見えるでしょうか。

社会・政治問題に深い関心を持つ滝朝子は、今回の作品では、普通の人々の現実に寄り添うことを原点として、やまきわ美術館のある上鰐池集落の人たちとの交流の中から得られた発想をもとに、建物の玄関で制作を行いました。異なる場所に所属する者がアートを通して出会うことで、一見おとぎ話のようにも見える、山間の小さな集落の現実の向こうに、より広い世界とのつながりが常に存在することを感じさせられます。また、展示の中心に設けられた、来館者向けの茶椅子は、外部の人々もその結び付きの一端であることを示唆しています。

飯沢康輔は、2015年中之条ビエンナーレにおける、イノシシを扱った作品の続編として、今回はウサギに取り組みました。文明と野生の境界がテーマである飯沢は、愛らしいイメージが流通するウサギを、消費社会における偽物の野生として、あるいは、畑を荒らす害獣のようなリアルな存在として、2重に捉えています。この作品構造の中に足を踏み入れる時、都市生活者も自然に日々接して生きる人たちも、通常感覚を揺らがす異界に紛れ込んだように思うかもしれません。しかし、それは人々の中に元からある何ものが引き起こす共鳴であり、それを野生の名残と飯沢は呼んでいます。

ミキョン・ソンは、仏教哲学を背景に、自身の心の内部を見つめることで今回の作品を制作しました。金色のインク壺を揺り動かすことで、世界を手中に収めるという全能感を得るとともに、7時間という長い間その動きを見つめるうちに、自身がその中の一つの粒子と一体となるような感覚に陥ったと、ソンは言います。このとき見つめているのは作家自身の深奥ですが、それは作品を見る観客に共感を呼び起こし、人々の内部はどこかで結びついているという感覚を生みます。また、普段はあまり使用することのない天井裏に展示することで、他の作品と比べて、内と外という対比が生まれており、同時に、天井裏はこの地域でオソラと呼ばれることから、より広い外界とのつながりを示唆してもいます。



滝朝子「隣人と社会」
」



飯沢康輔「ウサギ・ガジェット」



ミキョン・ソン「Gold」

本展における3人のテーマは全て、他の場所でも制作・展示し得るものですが、それぞれの作家が場と呼応することにより、他での展示とは少し異なる見せ方がされています。来館者の方にはゆっくりと時間を過ごしていただくことで、より深く作品と接することになり、作品を含んだ、「かりそめの」「擬似的な」家という、この場限りの体験ができるのではないかと思います。

ぜひ一度足をお運びください。